

■ 会報 50 号記念特集 「会報の歴史を振り返って」

編集委員会 編

その1 座談会「会報の歴史はOB会活動の歴史」

2012年2月25日 横浜国大キャンパスにほど近い某所にOB会報関係者が集まり、会報の歴史を語り始めました。参加したのは下記の方々で、若干(?)年齢が高めに偏っている気もしますが、皆さん気持ちはとても若く、昔の話を熱く語ったのでした。

嘉納 (1)、吉野 (2)、松本 (8)、鈴木 (9)、
下村 (10)、笛木 (19)、石垣 (20)、山崎 (22)



【 黎明期 会報0号～10号 】

- ・最初は松本さん(1)と嘉納さん(1)が相談して零号を出した(注:OB会発足の翌年1962年発行)。総会での正式な承認はされていないので零号とした。編集後記に書いてあるけどね。
- ・最初で既にタイプ印刷というのはすごい。
- ・黄金町のガード下にあったタイプ屋さんでね。機関誌のスカイラインの印刷に学生時代からすでに利用していたので。
- ・10号までは現在のシニアメンバーが担当し、年2回のペースで順調に発行していた。
- ・この辺りの会報は、皆さん若々しく活気に溢れているね。その後は生活に忙しくて途切れてしまったけれど……。1968年の安保闘争も大いに影響しているだろうね。
- ・ちょうどその頃9期の執行部の分裂(山派と里派)もあった。また、大学の封鎖とかもあった。
- ・事務局が一時つぶれた時期もあった。OB会活動も止まった。



号	発行年月日
0号	1962.09.20
1号	1963.10.30
2号	1964.09.30
3号	1965.05.01
4号	1965.10.20
5号	1966.03.01
6号	1966.11.01
7号	1967.08.01
8号	1967.11.23
9号	1968.07.15
10号	1968.12.01
11号	1973.6.30以降
12号	1974頃
13号	1975.12.01
14号	1976.12.01
15号	1977.06.18
16号	1999.12.05
17号	2000.08.06
18号	2000.12.16
19号	2001.09.08
20号	2002.06.30
21号	2002.09.07
22号	2002.12.15
23号	2003.03.30
24号	2003.08.23
25号	2003.12.13
26号	2004.04.18
27号	2004.09.12
28号	2005.02.20
29号	2005.07.15
30号	2005.09.10
31号	2005.12.23
32号	2006.04.01
33号	2006.09.01
34号	2006.12.25
35号	2007.03.20
36号	2007.08.31
37号	2008.01.15
38号	2008.04.01
39号	2008.09.01
40号	2008.12.27
41号	2009.04.01
42号	2009.09.01
43号	2009.12.26
44号	2010.04.07
45号	2010.09.01
46号	2010.12.27
47号	2011.04.01
48号	2011.09.06
49号	2011.12.30
50号	2012.04.01

・・・(1968年12月～1973年6月 第1次空白期間 約5年間)・・・

【 第1回復刊期 会報11号～15号 】

- ・そして、5年後に復活。編集長の居ない時もある、11号、12号は発行年月日がはっきりしない。
- ・13～15号も編集長は不明。更に15号は全て手書きだった。
- ・手書きはやむにやまれず出した感じだ。みんなに知らせる必要があった。
- ・遭難事故だね。OB会を起こさないといけない時期だった。
- ・1976年のことだね。その年は遭難が続いた。
- ・15号は創部20周年のお知らせをしているし、創部20周年記念パーティー、スカイライン20周年記念号、会則改正など重要事項が沢山載っている。
- ・しかし、その後の22年間は途切れてしまった。(1977年～1999年)
- ・その間もOB通信なるものは出ていたんだけど、もっとあるはずだが部室に残っていない。しかし、OB総会はやっていた。

・・・(1977年6月～1999年12月 第2次空白期間 約22年間)・・・

【 第2回復刊期 16号～30号 】

- ・会報の歴史を見ると実におもしろい。特に16号の復活はすごいね。
- ・22年後に田村さん(34)が復活させた(注:1999年12月発行)。OB会をなんとかしよう活動をした人達がいたんだ。当時の功労者がここに出席していないのは残念だね。
- ・16号の編集後記にもその思い出がとても入っている。30期から34期にかけての人達が頑張ってくれたんだ。
- ・最初は年1回だった。
- ・OB会報とOB会活動は一体化したものと考えべきだ。組織ができないと会報は出せない。反対に会報が出せないと組織が衰えていることになる。つまり、会報は組織の盛衰を表しているんだね。
- ・OB会の再建も含めて、16号から現在の形になった。OB会の復活があって、小屋もリニューアルできた。
- ・16号からは途中行き詰った時もあったが、どうにか交代しながらやってきた。
- ・田村さん(34)が専任になって、その後下村さん(10)が引き継いで落ち着いた。今は年3回必ず発行している。
- ・そういう意味では田村さん(34)前後の期の人達は若い頃から関わっていてすごいね。



【 発展期 31号～現在 】

- ・(下村さんの編集委員長時代の感想は、との問いに)飲み会の席上でよく分かりもせずに編集委員長を引き受けたが、やってみて感じたのは、ワンゲルは奥が深いということ。人間としてすごい人達の集まりだと思った。色々なことをやっている人が多く、多様性がある。現役の人達にもこの思いを伝えたくて現役のページを設けた。意識的に繋げていかないと若い人達に引き

継がれない。

- 仕事が忙しい時期は無理があるが、仕事も落ち着いてくる 50 代前後になると、また昔の仲間と会う機会が増えてくる。
- 情熱を持っている若い人を役員会に引き込むのも大切だけど、私生活も大事にさせてあげたいね。無理をさせてはいけない。
- でも会報が出れば、私生活が忙しくても自然と繋がりは保たれるしね。
- 今は PC 力も必要な時代だよ。
- 一般的には年 3 回はすごいことだよ。他のクラブの人に言うとびっくりするね。
- 予算的には年 3 回は可能だけどね。
- 今はホームページ、メルマガと他の方法も使っているけど、それぞれの役割分担がある。ホームページは内容も豊富でリアルタイムではあるが、紙資料は寿命が長い。また、会報を送る時に会費の振込用紙も送ることができる。
- 会費の未納者リストを載せたときは注目されたね。効果もあったよ。
- 尋ね人もそういう意味では名簿の整理に少しは役立ったけれど、あまり見つからなかった。
- 個人名が載るとみんなの意識が向くね。それで、創部 50 周年記念行事にも繋がっていった。
- 創部 50 周年パーティーで初めて OB 会に顔を出した人もいます。その次の山小屋の 40 周年も盛り上がったしね。
- 記念誌（注：創部 50 周年記念誌「YVV50 年の歩み」）を作ったのもよかった。他の大学からも絶賛された。国会図書館にも寄贈した。
- あの時、全部の期が原稿を寄せてくれた。呼びかければみんなが応えてくれるところはワングルのいい所。
- 期別便りは非常に早くから取り組んでいるね。
- 昔の会報は構成員も若かったし、結婚・出産のニュースなどとてもアットホームな内容だったね。今は、大所帯でとても無理だけど。
- スカイラインは現役の発行で今はないけれど、全部デジタル化されている。会報も番号からやはり全てデジタル化されているのでいつでもホームページで読める。
- 世代間の違いはあっても、どんどん次の世代に引き継いでいかないといけない。
- 写真でも文章でも沢山の人のものを載せると、特に自分の知っている人がいると読んでくれる。フルネームで載せる良さが会報にはあるね。セキュリティも大切だけど会報は限定配布だからフルネームで載せることができる。
- とところで、今日はもっと歴代の編集長に集まって欲しかったよね。



.....

話が盛り上がり、皆さんの思い・情熱が際限なく噴き出して来ましたが、收拾がつかなくなったのでこの辺でお開きにさせていただきます。皆さん、ありがとうございました。

(編者より)

座談会形式でスタートし、最後にはブレインストーミング形式、いや、言いたいことを言いたいだけ言う形式になってしまいました。これは、参加された方々の若さの表れだと思います。尚、座談会の内容は整理・編集しておりますので、実際とは発言順が異なっていたり、実際の発言とは多少異なった表現となっている等があ

りますことをご容赦下さい。

最後に、皆さんが大いにお話しされたことを丁寧に記録して頂いた笛木さん（19）、本当にありがとうございました。

その2 インタビュー「こだわり」

座談会に参加された方々からの強いご要望で、第16号からの第2回復刊期に多大な貢献をされた田村さん（34）に紙面に登場してもらいましょう。



——会報の復刊にはどんなことに気を使いましたか。

全体として、私が編集者として意を砕いたことは、どうしても文章が多くなり、「重たい」感じになってしまうのを、どうやって「軽く」「パッと見で読む気になってもらう」体裁にしていくか、という部分でした。もちろん構成も毎号企画していましたが、同好会の会報としては「オーソドックス」な内容だったかと思います。

——第16号の復刊にあたり編集でこだわったことはどんなところですか。

まず第16号復刊にあたり、配慮したのは題字の部分でした。第15号の続きである以上、継続性を何らかの形で明らかにしておきたいと思い、題字部分についてはフォントも含めてあえて復古調としました。

内容的には、第16号については総会後のタイミングということで、総会報告が多くを占めていますが、その後の定番となる期別便りや現役報告といった記事はすでに復刊号には含まれていました。

会報の見た目の印象を左右する、章見出しの「灰色網掛け・白抜き」のスタイルですが、当時、わたしが職場（国交省）で報告書を作成するときに多用していたものを、そのまま流用しています。このスタイルは、手軽に「垢抜けた」感じを出すことができるので好んでいたのですが、会報題字のレトロ調との相性は？だったかもしれませんね。（次ページに続く）

ちなみに、第17号から第21号までは、藤井さん、後藤くんが編集担当でしたが、その時の網掛けの色が「黒」で、このスタイルにこだわりを持つ私としては、「ここは黒じゃなくて灰色なんだけどなあ」と、ひとり会報を見るたびに心で呟いていました。再び編集を担当した第22号からは、また網掛けがしっかり「灰色」に戻っています。ぜひご確認下さい（笑）。

——フォントや裏表紙にも何かこだわりはありますか。

第22号以降、私の担当する号はどんなに原稿が沢山あっても、最終ページ（裏表紙）だけは、奥付と写真一葉だけを載せるようにしました。これも、文字ばかりの「重たい印象」となるのを避けて、読者に読んでもらうために、「空白を意識的に使う」手法を導入したものです。また、第24号からは、英数字字体として「Century Gothic」を使い始めました。「Century Gothic」は、本文で日本語と混ぜて用いるには一般的ではない字体ですが、見た目の軽快さと端正な明朝体との意外な相性の良さが気に入って、使い始めたものです。こういったスタイルが今に至っても、基本的に引き継がれていることはまったく予想しないことでしたが、うれしい限りです。

.....

（编者からも一言）

期別便りや現役報告、見出しの「灰色」、フォントの「明朝と Century Gothic」、裏表紙の「写真1枚と奥付のみ」、など沢山のことがこの第50号にも脈々と引き継がれています。第16号はもはや復刊というよりも第二の創刊号ですね。また、編集者の心構えなどとても参考になりました。田村さん、ありがとうございました。

（OB会報第50号（2012.4.1）からの転載）